

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月4日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究C

研究期間：2010～2012

課題番号：22530519

研究課題名（和文） ライフストーリーセンター構築によるストーリーの社会学的研究

研究課題名（英文） Sociological Studies of Stories by Constructing Life Story Center

研究代表者 塚田 守 (TSUKADA MAMORU)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：80217273

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、インタビューで聞き取られた「語られたストーリー」と教育実践を通して収集された「自分史のエッセイ」をウェブ上のホームページにアーカイブ化をすることであった。人々のライフストーリーをアーカイブ化し発信し、ライフストーリーを聞くこと、書くこと、そして、読むことの意義についての社会学的考察の機会を与えている。また、他の人のライフストーリーを読む機会を提供し、一般の人々に自らの人生について考察する可能性を示している。

研究成果の概要（英文）：

The project was designed to create a life story center in a homepage on the web in which “told stories” based upon interviews and “personal essays” collected through educational practice are archived for the public. The center provides a sociological forum to discuss the significance of listening to, writing about, and reading of life stories. It also provides other people’s stories available for the public and gives an opportunity to make them reflect on their own life stories.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ライフストーリー、アーカイブ化、自分史のエッセイ、インタビュー

1. 研究開始当初の背景

研究開始の2010年において、海外では、データのアーカイブ化への動きはさまざまな分野ですすめられていたが、Denshoに代表されるような日系アメリカ人の歴史に限定したアーカイブ化、海外のオーラルヒストリープロジェクトを実施しているセンターでは、「個人のライフストーリー」をデジタル化し、映像あるいは文章でアーカイブ化し、歴史的記憶として記録する試みが行われている。たとえば、アメリカのBaylor University, Institute for Oral Historyがそれにあたる。また、南メイン州立大学のLife Story Centerでは歴史的な記憶を記録として残すために、訓練を受けた学生がインタビューをしたストーリーをアーカイブ化し、一般の人々に公開している。

しかし、日本においては、人々のストーリーをアーカイブ化する試みは、一般的には、特定のテーマに基づいたものに限定されたものである。たとえば、神戸大学の異文化交流センターは外国人労働者のストーリーをアーカイブ化しているが、それは、一般の人々に公開されることを目的とせず、実態調査のためのアーカイブ化である。また、「戦争体験放映保存の会」のように歴史的記録として、戦争体験の継承を目的として、映像による証言を保存しようとしているところもある。さらに、個人のレベルでのアーカイブ化の例として、北星学園大学の吉田かよこ氏による『オーラルヒストリーの映像アーカイブの構築及びウェブ上での公開に関わる諸条件の研究』（2007年）がある。海外でのアーカイブ化を実践している例を紹介、参考にしながら、それらを、大学のホームページに、北海道におけるアイヌの人々の歴史と現状について映像を用いたインタビューをアップしている。

しかし、2010年の段階では、多様な個人のライフストーリーのアーカイブ化の試みはまだ日本ではあまり行われていない状態であった。

2. 研究の目的

本研究、「ライフストーリーセンター構築によるストーリーの社会学的研究」の目的は、個人が自らの言葉で綴った「自己のライフストーリー」とインタビューによって聞き取られた「他者のライフストーリー」を収集しデジタル化した上で、分類、インデックス化する

ことで、ライフストーリーのアーカイブを構築し、一般に公開するためのライフストーリーセンターを創設することを目的とした。そのセンターに多様なライフストーリーをアーカイブ化し、研究者には研究するためのデータを提供し、一般の人々には「自己のライフストーリー」を書く機会と「他者のライフストーリー」を読む機会を提供し、自らの人生について再考する場を提供しようと考え、始められた。

3. 研究の方法

本研究プロジェクトの研究者たちは、共通してライフストーリー研究に興味を持ち、ライフストーリー・インタビュー調査や授業の中で学生たちに自分史のエッセイを書かせる実践を行ってきた。初年度は、それぞれの研究者がそれまでに蓄積していた「語られたストーリー」と「自分史のエッセイ」を編集整理して、ライフストーリーセンター：「ライフストーリー文庫～きのうの私」に掲載しアーカイブ化した。2年度及び3年度は、その期間中にインタビュー調査で得られた「語られたストーリー」と「ライフヒストリー研究」あるいは「社会学」の授業をとって収集された「語られたストーリー」及び「自分史のエッセイ」を編集整理し、「ライフストーリー文庫～きのうの私」にアーカイブ化を行った。それぞれのストーリーにタイトル、要約、目次などが付けられ、構築されたホームページで、検索機能によりキーワードでアクセスできるようにされている。

4. 研究成果

社会学を専攻し、特に、ライフストーリー研究をテーマとする3人が、ライフストーリーのアーカイブ化とストーリーの社会学的研究の可能性について考察するために、本研究テーマである「ライフストーリーセンター構築によるストーリーの社会学的研究」を行った。3人はそれぞれライフストーリー研究を行ってきたという点では共通の関心ごとを持っているが、具体的な研究テーマ、方法論、あるいは、教育実践において、それぞれの特徴を持っている。その特徴を活かし共同研究を行い、役割分担をして研究成果を出した。研究成果は以下である。

1) ストーリーを語り、読むことの重要性について論じながら、そのストーリーを公開し広

く読まれる価値を確認した。そして、ロバート・アトキンソンがアメリカで設立しているライフストーリーセンターについて研究した上で、本研究のストーリーのアーカイヴ化であるライフストーリーセンター「ライフストーリー文庫～きのうの私～」の設立、公開した。

2) 「ライフストーリー文庫～きのうの私～」にストーリーを公開していく過程を通して、人びとに読まれる魅力あるストーリーにするためには、編集上の工夫や技術が重要であると認識し、タイトルの工夫、あらましと目次の整理、読みやすい文章への校正作業などを行う必要があることが分かった。

3) ライフストーリー研究の過去と今について整理し、ライフストーリー研究の現在を概観した。そのレビューの方法として、ライフストーリーが社会調査のテキストの中でどのように扱われているか、ライフストーリー研究を主眼とする3つの研究会の活動の中でどのような位置づけになっているか、そして、最後に、ライフストーリー研究の2人の代表的な研究者の最新の著書を読み解くことで、ライフストーリー研究のレビューを行い、現状について包括的なまとめを提供している。

4) 自分史をライフストーリーの一つの形態と考え、自分史の社会学的研究の意義を明らかにした。自分史のもつストーリー性に注目し、自分史作品をレビューし、その特徴について分析した。また、自分史作品が書かれる動機に関する議論を整理し上で、若者が書く自分史作品に注目した。その自分史作品を、自己の物語だと見なし、物語論から自分史を論じることができるとした。

5) ライフストーリー・インタビューに関する理論的な議論を包括的にレビューしている。次に、本研究がめざしているストーリーのアーカイヴ化している実践例を紹介し、それぞれの特徴をまとめている。そして、最後に、研究分担者自らがライフストーリー研究のテーマとしている男性養護教員に関するライフストーリー・インタビュー調査に基づいたライフストーリーの社会学的研究の実例を示し、インタビューは「人との出会い」であることにも触れ、ライフストーリー・インタビューに基づいた研究の意義があることという知見を得た。

6) 授業で受講生たちに対してインタビュー調査を課題とし、授業の実践を行うことで、ライフストーリー制作が学生に対してもつ教育的効果があると指摘できる。授業においてまず、ライフストーリー制作の動機付けから始め、具体的な語り手探しに関わる学生たちの声に触れている。また、実際に学生がインタビューする時の実践的技術や編集から作品完成までのプロセスは、学生にとって意義あるもので、インタビューは「人との出会い」としての教育的意義があると言える。

7) 授業で「自分史のエッセイ」を書かせる課題を課し、「自分史のエッセイ」を書く授業実践を分析し、自己語りとしての「自分史のエッセイを書く」作業は自己変革になるのではないかと考えられた。また、「自分史のエッセイ」として書かれたストーリーは、それ自体が一つのテキストとして、読者に読まれるべきものであるという前提で、それをウェブで公開する意義もあると考えられた。

以上のように、ライフストーリー研究に携わってきた共同研究で、「ライフストーリー文庫～きのうの私～」の創設し、運営することで、ストーリーの社会学の可能性を追求している。一つの特徴的な点は、自分史も自己の物語だと位置づけ、ストーリー研究の枠で考えている点である。ライフストーリー・インタビューに基づくライフストーリー研究は、「語られた物語」の内容だけでなく、「どのように語られたか」の視点を重視し、インタビュー調査における相互作用から生まれた「共同作品」であるということが強調される。それに対して、「自分的エッセイ」「自分史作品」はその相互作用の要素が少なく、対話ではなく、書き手の「モノログ」であり、共同作品とは言えないという議論があるかもしれない。しかし、「自分史のエッセイ」を書く、読む行為の中にも、「他人の視点」「人間関係」「読み手」などを強く意識し書くという点に注目し、インタビュー対象者の語り、「語られた物語」でもありと見なしている。ライフストーリーを語ることを通して、インタビュー対象者が過去の経験を再解釈し、意味付与をし、自己変革を起こすように、「自分史のエッセイ」も書く行為をとおして、自らの過去の体験を再解釈し、意味付与し、自己変革を起こす可能性があるという点では質的には同じではないかと考えている。ただし、インタビューからの働きかけがないので、相互作用から生まれる物語というよりはむしろ、「過去の自分との対話」、「語らなかつた自分との対話」として見なされるべきで、

本人の反省的な主体性をもっとも重要な要素になっている。

本研究の意義と今後の課題

第1の意義としては、まだ、質的なデータのアーカイブ化があまり進んでない現在、3人という研究チームのレベルで小さい規模ではあるが、ライフストーリーのアーカイブ化を行い、一般の読者に公開している点であるといえる。この公開されたライフストーリーが一般に人々にどれだけ役に立っているかは未知数であるが、このように発信することで、ストーリーを読む機会を供給している点は重要であると思われる。今の段階では、まだ、43編のストーリーに過ぎないが、「ふつうの」人々のストーリーを聞き、読む機会があまりないので、この後、数を増やすことで、その価値と意義が増すであろう。

第2の意義としては、ライフストーリー研究の過去と現在を概観し、ライフストーリー研究に対する包括的な理解を提供しているのではないと思われる。また、ライフストーリー研究の中に、若い年齢層が書く「自分史的エッセイ」に関わる議論を行い、物語論として展開する可能性に触れている点も本研究の意義であろう。いままで、自分史というと高齢層が自分の過去の経験を「歴史の記録として残す」ものという認識が一般的であったが、「自分史的エッセイを書く」行為は、インタビューによってインタビューされた語り手が語る行為と類似するものがあるという指摘をし、ライフストーリー研究の枠を広げる可能性について述べている。

第3として、ライフストーリー研究の教育的機能について触れた点も重要であろう。まず、「語られたストーリー」や「自分史的エッセイ」を学生が読むことで、「物語的思考」が活性化され、いままで、理解しようと思わなかったことに共感し、今まで知らなかった世界を知る可能性がある。次に、ライフストーリー研究の一環として、学生自らインタビューを行い、ライフストーリー作品を完成していくなかで、「人びととの出会い」を経験し、編集作業等を経験することで、他人理解、自己理解を深める可能性がある。インタビューをして他人のストーリーを理解し新しい発見をするように、「自分史的エッセイ」を書くプロセスで過去の体験の再解釈し、自己理解を深める可能性がある。大学教育のなか、ライフストーリー研究は単なる知識の獲得ではない、体験型の知を創造する可能性も持っていると言えるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- 1) 塚田 守 「語りによる『意味ある体験』の再解釈の可能性」『日本慢性看護学会誌』査読有、第6巻、2012年、2-9頁。
- 2) 川又俊則 「答志の寝屋制度と『放課後』」査読有、『生活コミュニケーション学』(鈴鹿短期大学生生活コミュニケーション学研究所) 3号、2012年 35-42頁。

[学会発表] (計8件)

- 1) 川又俊則 「大学生・短大生の書く自分史と成長」生活コミュニケーション学、研究所、研究例会報告、2013年3月7日、鈴鹿短期大学。
- 2) 川又俊則 「ピンクカラージョブとしての養護教諭—男性養護教諭インタビューによる社会学的考察」、第10回日本教育保健学会一般口演、2013年3月31日、國學院大學。
- 3) 塚田 守 「人が自分の物語を語る時、書く時、「自己変革」の可能性が生まれる」「慢性の病における他者への『言いづらさ』と看護のあり方についての研究会」2012年9月23日、京都ガーデンプラザ。
- 4) 川又俊則 「真珠島で活躍する若手海女」海女研究会、2012年10月29日、三重県立博物館。
- 5) 川又俊則 「宗教指導者の老年期の過ごし方—牧師・元牧師の語りを中心に—」第85回日本社会学会大会発表、2012年11月4日、札幌国際大学。
- 6) 川又俊則 「男性養護教諭へのインタビューとアーカイブをめぐって」日本オーラル・ヒストリー学会第9回大会、2011年9月11日、松山大学。
- 7) 塚田 守 「個人のホームページ上でのライフストーリーのアーカイブ化の可能性」日本オーラル・ヒストリー学会第9回大会、2011年9月11日、松山大学。
- 8) 塚田 守 「語りによる『意味ある体験』の再解釈の可能性」第5回日本慢性看護学会学術集会(招聘特別講演) 2011年6月26日、岐阜県立看護大学。

[図書] (計1件)

塚田 守 ナカニシヤ出版 『就活女子』2013年(7月出版予定) 185頁

[その他]

ホームページ等

ライフストーリー文庫～きのうの私～
<https://blog.sugiyama-u.ac.jp/user/mamoru/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

塚田 守 (TSUKADA MAMORU)
椋山女学園大学・国際コミュニケーション
学部・教授
研究者番号：80217273

(2) 研究分担者

横家 純一 (YOKOTA SUMIKAZU)
椋山女学園大学・国際コミュニケーション
学部・教授
研究者番号：80135277

(3) 研究分担者

川又 俊則 (KAWAMATA TOSHINORI)
鈴鹿短期大学・人文社会、教育系・教授
研究者番号：40425377